

【書評】

SODA Naoki

Conceptualizing the Malay World: Colonialism and Pan-Malay Identity in Malaya
[Kyoto Area Studies on Asia, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University]
(Kyoto University Press/ Trans Pacific Press, 2020)

富沢壽勇

本書は左右田直規氏が京都大学に提出した博士学位請求論文“Indigenizing Colonial Knowledge: The Formation of Pan-Malay Identity in British Malaya”（「植民地的知識を土着化する：英領マラヤにおける汎マレー・アイデンティティの形成」2008年）を書きあらためたものである。表題におけるキーワードの重心は変化したものの、植民地的知識とマレー世界の概念化との密接な関係性に着目した研究主題は一貫している。

著者は「植民地的知識」を「植民者側の被植民者側についての知識」と定義した上で、そのような植民地的知識が現地で受容され土着化していく過程と、マラヤ（現在の半島部マレーシア）における汎マレー・アイデンティティを追求する運動との相互作用を吟味検討することを本書の目的として設定し、被植民者側が植民者側の世界観をどのように、どの程度、どのような意図で受容し、修正し、適用していったのかを考察する。研究は主に文献資料に基づいて植民地教育と政治思想との相互作用を歴史的に分析する方法がとられている。

本書の章構成は以下の通り、序論を含めて7章で構成されている。

1. Introduction
2. Malay Vernacular Education in British Malaya
3. Knowledge and Experience: The Case of the Sultan Idris Training College
4. The Malay World in Textbooks: The Transmission of Colonial Knowledge
5. Ibrahim Haji Yaacob and Pan-Malayism: The Appropriation of Colonial Knowledge
6. *Melayu Raya* and Malaysia: Contested Pan-Malayism
7. Conclusion

第1章の序論では、植民地的知識が英領マラヤに土着化し受容される過程でマレー人概念がどのように再編成されていったかという著者の問題意識が提示され、マレー語媒体学校、とりわけスルタン・イドリス師範学校（Sultan Idris Training College: SITC）の教育内容を主たる研究対象とした経緯と資料の所在、研究方法、先行研究の検討と本論の構成が

示される。第2章では英領マラヤと同植民地期におけるマレー語媒体の在地教育の概況が説明される。そこでは英国人がマレー人をどのようなイメージでとらえ、マレー人に対する教育政策がどう展開していったのかも考察される。第3章では、そのような在地教育の標準化を期して1922年に現在のペラ州タンジョン・マリムに開校されたスルタン・イドリス師範学校の集約的な研究が展開し、同校の公式カリキュラム、課外活動や寮生活などの分析を通じて、学生たちがどのように知識と経験を積み重ねていったのかが検討される。そして、SITCの師範教育は民族、階級、ジェンダーの諸関係を再生産していったものとして特徴づけられるが、同時に教師も学生も一方的に受動的な姿勢ではなく、たとえばマレー人としてのアイデンティティ（マレー人性）を再定義し再編する動きも見られたことが指摘される。

続く第4章では、マレー世界についての知識がマレー語媒体学校の教科書を通じてどのように伝えられていったのかが分析される。この章は本書で最も多くの頁（40頁）が割かれており、特にマレー人の共同体（community）、領域（territoriality）、歴史（history）のとらえ方に焦点が当てられつつ、マレー世界を描く歴史や地理の教科書が分析される。共同体の議論では、A. ミルナーが主張したマレー社会における3つの異なる共同体の形式にそれぞれ対応するイデオロギ的指向性としてのクラジャアン（王権）、ウマ（イスラームの共同体としてのウンマ）、そしてバンサ（民族、マレー民族）の3類型に言及しつつも、1930年代初期までにはバンサを基盤としたアイデンティティがマレー社会ではより重要になっていったとし、議論の焦点はそのマレー人アイデンティティと領域観、歴史観との関係性に移っていく。マレー人の領域観としてはヌグリ（州、王国に対応 [評者注]）、タナー・ムラユ（マラヤ）、アラム・ムラユ（マレー世界）の三層構造があったとされ、特にマラヤ中心主義的な傾向が強かったことも指摘される。この三層構造の議論は後続の各章理解への重要な基盤ともなっている。第5章は、SITCの卒業生でもあるマレー人ナショナリスト、イブラヒム・ヤアコブの政治思想・行動に焦点が移り、彼がムラユ・ラヤあるいはインドネシア・ラヤと称される汎マレー・インドネシアの統合を主張するにおいて適用された知識が解明される。そこでは三層構造の中でもマレー世界により大きな強調点が置かれ、植民地的知識としての進歩主義的なマレー史観も修正されて前植民地期が黄金時代として再定位されたことが指摘される。第6章は第二次大戦後のマラヤにおいて展開したマレー人性（Malayness）についての異なる考え方が検討される。そして汎マレー・インドネシア主義的なナショナリズムの盛衰と1960年代に入ってからマレーシア連邦の結成とインドネシア共和国との対立問題等が論じられる。第7章は結論として全体の総括がなされ、現代のマレー人やマレーシアの社会と政治に持つ意味が示唆されている。

以上のように、本書は全体にSITCを中心とした歴史や地理の教育に焦点を当てつつ、植民地的知識の受容と土着化を論じ、マラヤ、マレーシアの近現代史が明快に分析されており、論考の完成度も高い。とりわけ主要テーマであるインドネシア・ラヤ、ムラユ・ラヤを中心とした汎マレー主義の展開については精緻な歴史的考察がされており、評者の研究関心とも重なるところが多く、刺激をもらった箇所が多々あった。本書の理論的な魅力

は植民地的知識の土着化あるいは流用 (appropriation) という視座から「マレー人性」や「マレー世界」の概念化がどのような展開を見せたかに着眼する方法にある。さらに応用問題として、それが独立後のマレーシア構想やブミプトラ概念など思想的に繋がるものであったことについても緻密な検証と考察が展開しているのも興味深いところである。

以下では読後感としていくつか気になったところを指摘しておきたい。

第一に、1980年代から90年代以降に活発化した GAPENA などのマレー世界 (ドゥニア・ムラユ) 運動、マレー・ディアスポラ運動等について結論部分で言及があり、それが著者の汎マレー主義運動研究との関連で位置づけされている箇所についてである (pp. 152-154)。特に、インドネシア・ラヤ、ムラユ・ラヤを中心とした汎マレー主義が脱植民地後の政治的統一体 (国家) を指向していたのと、グローバル化の中での社会・文化・経済交流を中心的な関心とする最近のマレー世界運動やその系譜を引くマレー・イスラーム世界 (ドゥニア・ムラユ=ドゥニア・イスラーム: DMDI) 運動とは大きな違いがあるという著者の見解はそれなりに理解することができる。他方、評者の知る限りではイブラヒム・フセインらを中心とするマレー世界運動、マレー・ディアスポラ運動でもイブラヒム・ヤアコブの思想にしばしば依拠していた事実を想起すると [Tomizawa 2010: 35]*、前者の文化思想・運動と後者の政治思想・運動とはやはり相互に繋がりが合っている側面は否めない。したがって、この問題は今後のさらなる検討と研究の価値が残されていると思う。

第二に、植民地的知識から敷衍されたと思われるマレーの空間認識の三層構造の理解についてである。この三層構造の最大レベルのものが「マレー世界」でありながら、その「マレー世界」は本書の中で論じられている一連の政治運動の中では具体的には「マレー群島」あるいは東南アジア島嶼部、いわゆるヌサントラの世界にとどまっているのも確かに政治的には現実的な限界であり事実であったのかもしれない。他方、1930年代から40年代にかけてのインドネシア・ラヤ、ムラユ・ラヤが、「マレー群島」をさらに超えて、マラヨ・ポリネシア語族 (オーストロネシア語族) といった広範囲の人々にまでマレー人概念を拡大解釈する姿勢に対応するものとした Ariffin Omar (1993)** などの議論を想起すると、そのような最広義の「マレー世界」がその後のインドネシア・ラヤ、ムラユ・ラヤの主張者たちの中でどのような過程を経て「マレー群島」に収縮 (?) していったのかも、さらにあらためて知りたいという疑問が残る。これに関連して、たとえばイブラヒム・ヤアコブが「マレーシア」(Malaysia) という語を「マレー世界」もしくは「マレー群島」と同義で使っていた時期 (1948年~1951年) があったことを指摘する文脈で、著者は「マラヨ・ポリネシア人 (Melayu-Polynesian) はマレーシア人 (Malaysian) に短縮される」というイブラヒムの主張を引用しているが (pp. 140-141)、そうなると東南アジ

* Tomizawa Hisao, 'Old and New Aspects of Malayness in the Contemporary *Dunia Melayu* Movement', Hashim Ismail (ed), *Tinta di Dada Naskhah*, Jabatan Penerbitan Akademi Pengajian Melayu, Universiti Malaya, 2010, pp. 29-44.

** Ariffin Omar, *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community 1945-1950*, Oxford University Press, 1993.

ア島嶼部を中心とする「マレー群島」と、より広域的な「マラヨ・ポリネシア語族」の分布域との関係を著者はどのようにとらえているのかという素朴な疑問が残されたことも付け加えておきたい。

第三に、付随的ながら、本書を通じて植民地的知識の伝達が学校教育の場では具体的には「科学的」な知識と呼応しながら展開したことが示されているのも興味深い論点である。これに関連して、評者が以前から常々疑問に思っていたこととして、マラヨ・ポリネシア語族（オーストロネシア語族）といった欧米由来の言語学的、学術的な概念が、そもそも何故に、またいかなる過程で当事者たちのマレー人概念、マレー世界の認識に影響を与えるに至ったか、ということがある。学術的、科学的知識が民族やエスニシティの主観的世界に影響を与える事例は少なくないが、このような世界でも最も広域に分布する語族概念が民族運動や政治運動に流用されたとすれば、是非ともその経緯と展開の実態についての思想史的な解明が必要であると考ええる。

いずれにせよ、本書の構成はよく組織され、英語自体も十分に質が高く、全体に明晰な論述が展開されており、評者はほぼ一気に引き込まれるように通読した。特に植民地期から脱植民地期にかけての「マレー世界」や「マレー人性」(Malayness)の思想史的研究として今後の研究者たちの必読書になるのではないかという感想を得た。

(とみざわ・ひさお 静岡県立大学)